

朗読の目的は、文章の「意味」を伝えることではありません。その文章によって、展開され、思い起こされ、想像される情景が、聞き手の頭の中にも、くっきりと、浮かび上がらなくてはならないのです。したがって、決して字面だけを追うのではなく、朗読する人は、あらかじめ、自分の中に具体的な情景のイメージを作ってから、読み始めるということではなりません。

具体的には、たくさんの人に対しての朗読でも、聞き手を一人だけだと想定して、その人に分からせるつもりで読めば、おのずと適切なペースも決まります。聞かせる対象のはっきりしていない読み方は、どんなに明瞭でも、内容がほとんど聞き手に染みてゆくこと、浸透することがないのです。

体はリラックスさせて読みましょう。リラックスさせた状態で読まないとは、緊張感を聞き手にも押し付けることになるのです。書かれている文章を、明瞭に、正確に発音するのが、朗読であるというのは、寂しい考え方ではないでしょうか。

一本調子に文章を読んでしまえば、聞き手にはなかなか伝わらないものです。まして、聞き手の「理解」ということを考えない、切れ目のない読み方では、意味ですらもろくに通じません。また、時間が過ぎて行く、場面が変わって行く、などのところでは、当然それなりの「間」が必要になってくるのです。しかし、ただメリハリをつければいいというものでもないのです。それはあくまでも文章の内容に基づいたものであるべきです。内容と結びつかない「調子」や「節」で、必要のない不自然なメリハリをつけるのは、誤りといえるでしょう。

文中の登場人物の「セリフ」は、それぞれの人物の感情になって読むことが基本です。しかし、その感情のもとになっている心の動きを、深く読み取ることが必要になってきます。それを忘れないで下さい。

「きらい」と書いてあっても「すき」であったり、「ばか」と書いてあっても、怒っていないこともありますね。セリフを読むときに、声色や作り声で読むといやらしく聞こえることが多いようです。それと同じように朗読全体に使う声も、朗読者の持っている声のレンジ、範囲の中から選ぶようにして、決して、借り物の声や、作り声、無理な発声であってははいけません。

朗読すること、文章を読むということは、技術的なことも、もちろん大切ですが、それよりもっと大切なことは「聞き手に、何かを聞かせることにより、どうゆう『感動』を興させようとするのか」という、目的意識です。この目的意識のあいまいな朗読は、いかに技術的に優れていても、決して聞き手を「感動」の高みまで羽ばたかせてはくれないのです。